

## 現代日本語におけるジェンダー行為遂行性 言語イデオロギーに依存する日常のジェンダー

ヘルシンキ大学  
世界文化研究科  
アンデルソン ポントス

### 初めに

「アイデンティティーが日常の行動において反映される」と言うと、誰も文句を言わないであろう。異なる言語を使うと、まるで別人になると感じることも多くあるし、誰でも同じ言語でも異なった場面でかなり違う振りまいをすることも少なくないであろう。おそらく、自分の子どもに対してビジネス敬語を使う親がいないであろうし、会社の引取にはタメ口が適切ではない筈である（しかし、取引が終わってからの飲み会が別の話かもしれない）。

また、Goffman (1959)の自己呈示についての理論によれば、反映されるだけではなく、アイデンティティーは人間が交流したり関わりあったりする場面において、行動によって構築されると言っても問題はあるまい。このアイデンティティーの一つの側面は、ジェンダーである。更に、行動の一つは、言語使用である。後ほど示されるように、日常生活における言語使用とジェンダーがかなり関係している。

特にジェンダーに関する理論として、Butler (1999)が導入したジェンダー行為遂行性（英：gender performativity）は、Goffman (1959)の自己呈示の理論を行為遂行性という概念の形で発展させ、言語などのパフォーマンスによってジェンダー規格が維持される或いは否定されるという理論である。言語学にとっても有意義な概念で、特に語用論と社会言語学におけるアイデンティティーと言語に関する研究では行為遂行性が使われるようになってきた（例えば、Bucholtz & Hall, 2005; Silverstein, 2003）。しかし、言語学の分野では、実践的で日常生活の発話に接近した研究が現在まで少なく、研究のための枠組みを精緻化する必要がある。

本論文の目的は、日本語におけるジェンダーを構築し表現する言語要素の研究に集中しながら、「ジェンダー」という概念の理論的な位置づけに貢献することである。より徹底的に言えば、ここで問題にされるのは、日常生活の言語使用におけるジェンダーの適切な分析水準がどこにあるかという疑問である。更に言い換えれば、ジェンダーは言うまでもなく日常生活に影響してくるが、ジェンダーを構築する本当の日常の言語使用をどこで見当たるであろうか。これらの疑問に対する答えによって、必要な考察方法が変わってくる。それに、言語使用者である人間のその言語使用の認識を問うために、何の道具をどのように用いるべきであろうか。

本論文の主張は、実際の使用時の発話から離れた書き言葉に近い（或いは、書き言葉として調査回答者に提供される）文を用いることによって、しばしば分析が誤った道を歩み出すとのことである。この違いに注目するために、同じ例を異なる観点から考察し、日常生活による接近した語用論のための適切な研究方法について論じる。ジェンダーの予備的な定義から出発してから、言語学の観点からそのジェンダーを表す言語を取り上げる。次に、実際に調査方法によって異なった例文を紹介する。最後にジェンダーについて有意義な研究を行うための観点を提案する。

この過程においてこつとなるのは、「言語イデオロギー」という概念であるが、まずはジェンダーについて論じておく必要がある。

## 1 「ジェンダー」と「性」（ジェンダーとは？）

ジェンダーは、単純に言えば、普通に「性」と言われることではない。しかし、よく混同されるので、「違うよ！」と言うだけで済まないであろう。より厳密に言えば、「性」とは生物学的<sup>1</sup>な概念で人間の身体の構造を指すものである。「性」の場合は、男性と女性の二つの極として認識されるが、実際にそれほど簡単ではない。生物学的な世界では、「男性」と「女性」と言うのは、しばしば実践の複雑な事情の役立つ単純化である。「ジェンダー」は、生物学的な「性」と殆ど関係はない（ただ、人間の想像の世界では関係がありそうで関係しているように扱われがちである）。

さて、「ジェンダー」とは、「性」と異なり、生物学的な概念ではなく、社会的な概念である。人間の生き方に関係してくるものであり、「Xとして生きる」と考えても良いであろう。そうすると、文化を考慮に入れた定義が必要となる。

上記のように性とジェンダーを区別する理由について少し述べる必要がある。それは、「性」と「ジェンダー」の違いを否定する見解もあるからである。例えば、Butler (1999)によれば、どちらも明白な差異点があらず、行為によって社会的に構築されるのである。確かに納得が行く議論であるが、ここで異なる概念として扱う理由は、生物学における「性」にはほぼ無関係の研究だからである。それを踏まえた上、次にアイデンティティーの定義について論じよう。

## 2 アイデンティティー

ここでは、アイデンティティーという概念が役に立つ。アイデンティティーは、「文化的に読み取られる行動」として捉えることが可能である (Sunderland, 2006:131)。例えば、国やサブカルチャーなどの文化による生活と習慣の詳細な違いと同様であろう。男女

---

1 言語学的に言えば性体系を有する言語もあるが、ここで説明しようとしている性とジェンダーの違いから外れるので、それぐらい単純化させてもらう。

の習慣は確かに文化によって異なること具体例が少なくないである。つまり、ジェンダーも「文化的に読み取れる行動」と言えよう。しかし、この文化的に読み取れる行動のなかで、「男性・女性」というのは社会的なジェンダーの極も、性の極と同様に、必然的な存在のない架空の構築物である。「男性・女性」という単純化した極を持った連続体（ましてや、二分法）の代わりに、ジェンダーを様々な立場として考えてみよう。そうすると、「俺」、「僕」、「あたい」、「わたくし」などの人称代名詞が表すアイデンティティ、「ぶりっ子」、会社などで典型的な「OL」、「サラリマン男性性）」、全て違ったジェンダー立場と関係すると考えられる。ジェンダーは、二つの極というよりも、むしろ多様で様々な立場が相互に存在している広場のようにあり、言語がその立場を支持する道具である。

つまり、ジェンダーの研究では、これらの立場のインデクス (Silverstein, 1976) を考察するか、2つの極のあるジェンダーの連続体を考察するかとのどちらかの見解によって、研究における考察の枠組みと結論が違ってくるのである。それは、考察の対象の理解があくまで研究における前提に影響するからである。ここでは、第一の見解がより有意義と見なし、ジェンダーが様々で発話状況において構築される立場であるとする。

### 3 文化の枠組みの中での行動としての言語

以上では、ジェンダーとは文化的に読み取れる行動の一つであるとした。文化的に読み取れる行動のうち、「話し方・喋り方」がある。服装とともに、話し方は恐らく最も効率的に意図的に操作可能な行動に含まれる一つである。しかし、「話し方」、「喋り方」、「言葉遣い」などがあまりに非科学的に振る舞う言葉であり、より厳密な考察のためにより進化が進んだ語彙が必要である。それ故、以下で言語学の分野における先行研究を紹介する。

言語学の観点から見れば、ジェンダーの表現に用いられる「話し方・喋り方」を考察するための方法がいくつかある。そのうち、意味論、語用論、音声学（とそれぞれの扱う語彙、待遇表現、音声など）の様々な領域がある。言語学の伝統では、様々な観点からジェンダーを表す言語要素に関する研究が決して少ないわけではない。日本語に関する研究も例外ではない。ジェンダーによって使用傾向が異なる終助詞（例えば、複合終助詞「のよ」）に関して Sakada (1991)、第一と第二言語におけるジェンダー規約とその構築に関する Okamoto (1997)、ジェンダーと上下位関係における力の差に由来する発話行為を用いた語用論的な戦略に関する Takano (2005)、面談におけるコミュニケーションの立場のジェンダーによる差異を取り上げる Tanaka (2009)、様々な研究がされている。しかし、Okamoto & Shibamoto Smith (2008)が指摘するように、日常生活の言語から遠い研究がジェンダー規格を考察するというよりも、規範的なディスコースとしてむしろジェンダー規格を強化してしてしまう可能性もある。

異なる領域の道具は異なる結論を生み出すことが十分考えられる。一つの例を以下の第

3 章で考察しよう。ここでは、言語イデオロギーが登場する。Silverstein (1979)によれば、言語イデオロギーは言語使用の裏付けとして機能する信念の体系である。以下で聞き手の信念を把握するための二つの方法と音声を取り上げることの重要性に関して論じる。

#### 4 発話と文の判断の不一致

上記の理論的な話を具体化するために、例を取り上げる必要がある。ここで取り上げる例では、ジェンダーと性が一致しないトランスジェンダーの言語使用者とジェンダーと性が一致するシスジェンダー<sup>2</sup>の発話が更なる議論の基礎となる。<sup>3</sup>

次の3つの例文を考察しよう。

(1) どういうお仕事やってらっしゃるの。

(2) はい、元気です、おかげさまで。

(3) はい、じゃ今日これぐらいにし、かなり短い動画になっちゃいましたけど、今日はこれぐらいにしたいと思います。

(1)は、語彙などから見れば、大抵女性が発する文として認識されるであろう。しかし、一定の実際発される録音の判断を調査したら、「女性らしくない」という判断が多くあった。代わりに、(2)は語彙などから見ればニュートラルのようであるが、音声が含まれた調査では「女性らしい」と判断された。更に、(3)が語彙などからするとジェンダーを自信を持って想起できないであろうが、音声を含んだ発話が大抵「女性らしい」と判断された。ここで興味深いのは、(1)と(3)はトランスジェンダーの女性で、(2)がシスジェンダーの女性である。即ち、判断が異なった理由は、性ではなく、ジェンダーである。おそらくジェンダーを表すための音声の操作の影響が文の語彙と文法ほど強力であることになっている。

以上の例で見られるように、聞き手の判断の調査が発話と文に関する言語観の不一致を示す。音声を含めた発話の判断と音声なしでの判断は異なる理由は、なぜであろうか。また、どちらの判断が実際の言語使用について有意義に述べているであろうか。本論文の提案は、大抵意識されていない言語イデオロギーが様々な領域に影響を及ぼすので、文のみ

---

2 言うまでもないが、念の為に：ここでいう「トランスジェンダー」と「シスジェンダー」は、性（身体的こと）ではなく、ジェンダー（自ら感じたり他人の認識における社会的な存在のこと）を指す。つまり、手術などを受けているかどうかと無関係である。

3 ここで用いている例文は筆者が名古屋大学の修士論文のために行った心理言語学的な調査から取った。回答者が16人ほどで少ないが、一定の傾向を示すためにこの議論に用いる。

と音声を伴った発話の異なる分析の水準では異なる判断が生じるというのである。説明において役立つ Silverstein (1979)による「言語イデオロギー」という概念があり、以下で論じる。

さて、文と音声を伴った発話がなぜ異なるのか。書かれた文が抽象的な言語であるのに対して、音声が含まれた発話がより実際の使用時に接近し、そのため聞き手の言語イデオロギーをより直接に活性化させることが考えられる。言語イデオロギーとは、Silverstein (1979)のいう言語に関する信念のことである。このイデオロギーは、普段の話し手が全く知らないわけではないので、聞き手の判断が言語使用のシステムの構造の手掛かりとなり得る。即ち、聞き手に特定の印象を与えることがその発話の機能と思っても良いであろう。そうならば、ジェンダーの語用論の最も適切な分析は抽象的な文より音声を含んだ発話にあるはずである。

以上にしたがって、言語を用いたパフォーマンスから生じる語用論的な意味が語彙と文法、その二つよるポライトネス効果、などによるものだけではなく、音声も重要な部分である。しかし、今までしばしば見逃されてきた音声の含んだ発話の重要性を判断するために、どうすれば良いであろうか。以下において、このために適切な分析水準と観点について論じる。

## 5 日常生活における言語イデオロギーの適切な分析水準と観点とは

Silverstein (1976; 1979; 2003)が記述する言語観では、語用論が意味論と同様に水準に置かれる。それと異なり、意味論はしばしば語用論より先であると考えられるが、日常生活の語用論的な現象の研究ではそういった考え方が効率的ではない。むしろ、必要となるのは、意味論に頼らない語用論である。言うまでもなく、その語用論は意味論と全く無関係なわけではないが、意味論が第一であるというより、むしろ相互に関係しながら両立しているわけである。それに、以上で紹介した例が示すように、この意味論から（ある程度）独立した語用論を音声学と一緒に見る必要がある。そうすると、言語の一面だけではなく、より完全な日常生活の言語の研究が可能になる。

このようにして、我々が日常生活において当たり前のように表現するジェンダーは語用論的な発話行為だけでなく、音声などについてのメタ語用論的なイデオロギーの構造・知識にも依存するものでもある。この構築・知識はジェンダーに関する言語イデオロギーに由来するものである。つまり、言語イデオロギーとアイデンティティーが相互に独立したものではなく、むしろ密接に関係している現象なのである。この知識とイデオロギーを明らかにするために、聴者の判断を言語学の分析に導入することが必要である。そうすると、語用論的な分析によって、言語によるアイデンティティーのパフォーマンスはイデオロギーを覗くことが出来る窓となるのである。

## 6 結論

本論文のはじめに、日常生活の言語使用とその理解によって言語イデオロギーが反映されていると述べた。ジェンダー規格は言語イデオロギーの一つの側面であり、日常的な行動としての言語使用と密接に関係している。しかし、指摘したように、書かれた文のみでは文脈における語用論的な意味が現れないと思える。音声を含むかどうかによって判断が異なった例文で示したように、日常における言語使用のより包括的な研究のために、見逃されてきた言語の側面を導入する必要がある。この側面は、書かれた文のみの分析では手が届かない音声と聞き手による判断の二つである。つまり、上記の例の異なる判断によって示されるように、文法、語彙などに、音声でも重要なアイデンティティーのインデクスなのである。

上記にしたがって、音声を伴った言語（つまり、録音したもの）を調査の回答者に提供すると新たな情報が手に入れられる。聞き手の判断を参照することによって伝統的な言語学による分析を強化することが可能である。このような研究によって、日常生活におけるジェンダーのパフォーマンスの理解が深まり、言語とジェンダーの問題に、更に文化を有する社会的な動物である人間の行動の謎でも解けるであろう。

## 参考文献

- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bucholtz, M. & Hall, K. (2005). *Identity and interaction: a sociocultural linguistic approach*. *Discourse Studies* 2005 7: 585.
- Butler, J. (1999) [1990]. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.
- Goffman, E. (1959). *Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Routledge.
- Okamoto, S. (1997). *Social context, linguistic ideology, and indexical expressions in Japanese*. *Journal of Pragmatics* 28 (1997), 795-817.
- Okamoto, S. & Shibamoto Smith, J. S. (2008). *Constructing linguistic femininity in contemporary Japan: scholarly and popular representations*. *Gender and Language*, vol 2.1 (2008), 87-112.
- Sakata, M. (1991). *The acquisition of Japanese 'gender' particles*. *Language & Communication*. Vol. II, no. 3, pp. 117-125
- Silverstein, M. (1976). "Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description." *Meaning in Anthropology*, ed. Keith Basso and Henry A. Selby. Albuquerque: UNM Press, 1976.
- Silverstein, M. (1979). *Language Structure and Linguistic Ideology*. In P. Clyne, W. Hanks, and C. Hofbauer (eds.), *The Elements* (pp. 193-248). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Silverstein, M. (2003). *Indexical order and the dialectics of sociolinguistic life*. *Language & Communication* 23 (2003), 193-229.
- Sunderland, J. (2006). *Language and Gender: an advanced resource book*. New York: Routledge.

Takano, S. (2005). *Re-examining linguistic power: strategic uses of directives by professional Japanese women in positions of authority and leadership*. *Journal of Pragmatics* 37 (2005), pp. 633-666

Tanaka, L. (2009), *Communicative stances in Japanese interviews: Gender differences in formal interactions*. *Language & Communication* 29 (2009), pp. 366-382